

2017年度新入生による「学生相談室アンケート」改訂版の検討 — 侵襲性への配慮と現在の学生特徴を踏まえて —

*Consideration of Revised Questionnaire of Student Counseling Room for New Student
in FY2017*

— With Consideration for Invasiveness and Current Student's Characteristics —

北岡 智子 *Tomoko Kitaoka*

(非常勤学生相談室員)

伊藤 由夏 *Yuka Ito*

(非常勤学生相談室員)

井村 安之 *Yasuyuki Imura*

(非常勤学生相談室員)

山内 恵理子 *Eriko Yamauchi*

(非常勤学生相談室員)

I はじめに

学生相談は今や大学教育の一環として位置づけられ、カウンセリングや心理療法のみには留まらない予防的・教育的機能や他職員との連携や調整の機能を担うようになった。このような中で、本学学生相談室では、多様化する学生のニーズに応え、より効果的な“支援”ないし“より積極的な働きかけ”を行うために、新入生アンケートの実施や新入生向けのイベントを実施してきた。また他学年・他学科が参加できるグループ活動などを東キャンパス・西キャンパスにて実施してきている。中でも2006年度より新入生を対象とする「学生相談室アンケート」は10年間継続して実施され、本学の新入生が、『どのような“これまでの生活”を送ってきており、どのような“本学への志望から入学まで”を経験してきており、どのような“本学での生活”を希望しており、どのような“現在の心境”を持っているか』について実態調査（「学生相談室アンケート」）を行い、その結果を「教育臨床心理学」ないし「教育現場における心理臨床」の視点から検討した。その概要は後藤他¹⁾より山内他²⁾まで既に報告している。

2017年度より本学の学部改編があり、また「学生相談室アンケート」の実施が始まった10年前に比べ学生はより多様化し、「悩めない」学生や、「自身の感情の把握や内面の言語化を苦手とする」学生が本学でも増加しているように思われる（栗津他³⁾）（北岡他⁴⁾）。そこで2017年度では、そのような変化に伴い多様化している学生の実態を調査し、新入生がどのような情報や支援を大学に期待しているかを把握するため、従来の「学生相談室アンケート」の項目改訂を行った。ここでは、今年度の調査結果を報告するとともに、今後の「学生相談室アンケート」質問項目についても再検討を行うことにする。

Ⅱ 問題と目的

「学生相談室アンケート」項目改訂を行うにあたり、まずは、本学での入学時の新入生に向けた活動と「学生相談室アンケート」の実施状況について述べるとともに、他大学で実施されている新入生アンケートについて、そのメリットと問題点等を検討していくことにする。

1. 入学期の特徴と新入生に向けた活動

入学期（入学後1年）は、学生が今までに慣れ親しんだ生活から離れ、大学での新しい生活へと移行する時期である。特に新入生はこれまでの生活に別れを告げた直後に、すぐに新しい環境へと適応が迫られる。その過程において多くの学生が多かれ少なかれ戸惑いを経験し、中には高校からの心理的問題を持ち越して入学してくる学生もいる（早坂⁵⁾）。この変化の大きな時期にカウンセラー（相談員）ができることは、移行に伴ってどのような問題が生じやすいか示し、解決の選択肢の1つとして学生相談室という機関の存在を周知し、援助の必要がある学生の来室を促すことと言われている⁵⁾。その機会として、新入生のオリエンテーションと入学時調査が実施される場合がある。

本学においても東西の両キャンパスにおいて新入生のオリエンテーションが実施されている。新入生オリエンテーションのプログラムの中に学生相談室案内の時間が設けられている。両キャンパスともに学生相談室案内は30分ほど時間が設けられており、その中で、相談員が学生相談室案内や学生生活を送るにあたってのキャンパスガイドについてパワーポイントを使用し説明、また相談員の自己紹介と「学生相談室アンケート」を実施している。「学生相談室アンケート」に割り当てている時間は10分程度となっている。新入生は連日、履修説明や登録の仕方、健康調査や広報アンケート、さらに部活サークル案内など多くの情報を聞き、また登録や様々なアンケート調査を受けている。オリエンテーションの時期は、緊張と過活動の状態になりやすく疲れた表情の学生も見られる。

このような新入生の状況を考えると学生相談室が独自で新入生に向けてアンケートを実施する際、限られた設定時間の中で学生にとって侵襲性の少ない安全なアンケートが重要であると考えられる。学生の負担を減らすということを考えれば学生相談室のアンケートを実施しないということも一つ考え得るが、学生相談室という案内情報について学生が目と耳だけで情報を得るよりも、アンケートを主体的に答えるあるいは、答えない（アンケート実施に無回答という形で表現する）ことにより、一層学生相談室という場所が大学内に存在しているということが認識されると思われる。これまでも学生相談室来室者の中には「新入生オリエンテーションの時に学生相談室案内を聞いた」「オリエンテーションでアンケートをしたのは覚えている」といった言葉は聞かれており、この入学して間もない不安定な時期に学生相談室案内とアンケートを実施することで入学早期での自主来室につながっていると考えられる。

2. 他大学での入学時調査

(1) UPI (University Personality Inventory) について

多くの大学が新入生を対象としてオリエンテーションの時期に調査を実施している。中でもUPI (University Personality Inventory) は、全国大学保健管理協会の学生相談カウンセラーと精神科医が中心に開発した、主に大学新入生の精神身体的な問題の把握と早期介入を目的としたスクリーニングテストである。新入生オリエンテーションなどで実施される調査としてスタンダードである。これまでに多くの大学で用いられてきた(近田⁶⁾(松原⁷⁾)。無料で使用でき、精神症状や身体症状のみでなく、日常的な困りごとを含んだ、学生にとって答えやすい質問項目からなるとされている(吉武⁸⁾(吉村⁹⁾)。ただし質問項目数は60項目と多く、妥当性や信頼性の検証が不十分ということもあった。それを受け酒井他¹⁰⁾は、より精度が高く簡便な精神的健康度のスクリーニング検査として16項目で構成された短縮版のUPI (UPI16T) の作成を試みている。このように、UPIは入学直後の新入生に対して実施され、実施後にはカウンセラーなどの専門家がフォローアップ面談(呼び出し面接)をしている場合がある。しかし、入学時調査、とりわけスクリーニングを目的とした調査はメリットもあるが、そのリスクとコストをよく考慮した上で実施する必要があるとされている⁵⁾。メリットとしては、援助が必要な学生、とりわけ精神疾患や発達障害を持つ学生の実態や、早期援助に役立つデータが得られるため、今後の教育・予防活動に生かせるということが挙げられる。一方、リスクとしては、「あなたは精神的に問題があるかもしれない」と大学に評価されると新入生が躓き・傷つき体験として捉えかねないということが挙げられている。短縮版UPIでは、鋭敏に病理を測定できる項目が選択された反面、項目内容としては、原版UPIに比べて気軽に回答しづらいものになっている¹⁰⁾ことから、新入生には回答することに負担がかかると考えられる。

(2) 大学生版発達障害チェックリスト

2016年4月から「障害者差別解消法」の施行により、障害のある学生への合理的配慮の提供が国公立大学では義務化され、私立大学においては努力義務化され、大学全体での組織的な整備が求められてきている背景もあり、発達障害のチェックリストをスクリーニングテストとして新入生に実施している大学がある。東京都市大学DOL支援プロジェクト¹¹⁾は新入生全員に入学時に「勉学に関する新入生アンケート」と目的を明確にして、発達障害の行動特性により困っているかどうかを把握し支援に繋げている。また、「発達障害のある学生支援ケースブック」において、「困り感に関するセルフチェックリスト」(佐藤¹²⁾¹³⁾が紹介され、これを入学後のスクリーニングの一つとして活用したり、学生本人が自己を見つめる際のツールとして紹介されている。ただし、こちらのチェックリストにおいても注意点があり、「発達障害」という用語を使用することに抵抗を感じる人がいる。「困り感」という表現であれば抵抗は少ないが、いずれにしても実施にあたってきちんと説明して行うべきものとされている。個人情報の保護という観点から、チェックリストを

行うことで倫理的な問題が発生することもあり、実施にあたって学生に説明し同意を得る必要がある。また結果を誰がどのように活用するかということも明確にしておく必要がある。結果は、学生本人の利益につながるように用いることであり、支援体制が整っていない段階でチェックリストのみ行うことは不安感を学生に与えるに過ぎない(滝沢¹⁴⁾)。このことから、本大学で学生相談室が「困り感に関するセルフチェックリスト」を導入する場合、新入生にオリエンテーション時に一斉に実施するため、わずかな時間で学生に十分な説明を行うことは困難である。また、在学生の面接や支援のために、相談室の予約はほぼ埋まっているため、実施後も新入生に十分なフォローをするための面接時間を確保できない。このため、新入生に「困り感に関するチェックリスト」を実施することは適切ではないと考えられる。

以上、本学での入学時の新入生への活動と「学生相談室アンケート」の実施状況、他大学で実施されている新入生アンケートについて述べてきたように、新入生に対して学生相談室が行う支援の第一歩として、入学時の緊張と過活動で疲弊している新入生に、いかに侵襲性が低く、傷つき体験にならないような答えやすく、さらには現在の学生特徴に合った「学生相談室アンケート」を作成し、実施していくことは非常に意義あることといえる。このようなことを踏まえ、今回、どのような点に留意し、「学生相談室アンケート」の改訂を行なったかを述べるとともに、今年度の調査結果の報告、考察を行い、今後の「学生相談室アンケート」質問項目について、さらに検討していくことを本稿の目的としたい。

Ⅲ 「学生相談室アンケート」の改訂と調査の概要

1. 「学生相談室アンケート」の改訂

本学ではスクリーニングを目的とした「UPI」や大学生版発達障害チェックリスト「困り感に関するセルフチェックリスト」は学生の負担を考慮し使用せず、従来通りの『どのような“これまでの生活”を送ってきており、どのような“本学への志望から入学まで”を経験してきており、どのような“現在の心境”を持っているか、また大学に対してどのような“情報や支援”を希望しているか』についての実態調査(「相談室アンケート」)の改定を行って実施した。

項目改訂は、この10年データの変動が少ない質問項目を削除し、「Ⅲ 現在の心境について」について質問の修正と追加を行った(添付資料1)。改訂版の学生相談室アンケート(3-1)「現在、不安や心配に感じていることは」の有無については、従来のアンケートの(4-1)「自分の性格・健康・家族・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすることが」の有無に該当するが、「悩んだりする」という表記を「不安や心配を感じていることは」と修正した。栗津他³⁾は過去5年の本調査結果を検討して、「悩みはな

い」と回答する学生が増加傾向にあることを指摘し、一方で山内他²⁾が「悩みがない」と回答する学生は増加しているが、学生相談室に来室する学生数は減少するわけではなく、増加を続けているという現状（表1）を報告している。このことから、「悩む」「困る」まで自覚はされていないが漠然とした不安や心配を感じている学生が現在の大学生の特徴と考えられ、それに即して修正を行った。

表1 年度別学生相談室来室者数（延べ数）

年度	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年
来室者	673	838	959	944	1097	1487	1576

改訂版アンケート（3-2）（3-3）の質問項目においても、従来のアンケート（4-2）（4-3）では「困っている内容について」「それらについて相談できる人が身近にいるか」を選択する項目であったが、「不安や心配に思っている内容は」「不安や心配なときに相談できる相手が身近にいるか」と「不安や心配」という表記に統一した。さらに改訂版（3-4）では、「そのときの相談相手 話し相手は」と具体的な相談相手分かるように質問項目を追加した。選択肢として、「1. 友人」「2. 家族」「3. 先生」「4. SNS（ツイッターなどの交流サイト）」「5. その他」を挙げた。中でも「4. SNS」を選択肢に加えたのは、今では中学生や小学生までも、それらの機器を駆使している子どもが多く見られ、昨今の学生にとって、携帯電話やスマートフォンなどのモバイル機器が、人間関係を円滑に維持していくために必須のツールだからである。ネットへの接続が一般的になり、ブログや掲示板、チャットなど新しいコミュニケーション・ツールとして普及してきている。そして今では、スマートフォンが一気に普及したことにより、例えばLINEのようにアプリケーション・ソフトウェアによる24時間の常時接続もごく普通のこととなったため、コミュニケーションのスタイルが従来と異なり、時間や場所を全く気にせずには繰り返されるようになったと言われている（土井¹⁵⁾）。このことから、「相談相手・話し相手」の選択肢として、SNSで見知らぬ相手と相談したり、話し相手として選択される可能性があると考えられ、選択項目に加えた。（3-5）では「親しい友人がこれまでに」の有無を質問項目に加えた。（3-5）の項目を追加したことは、従来のアンケートでは「Ⅰ これまでの生活について」として「（1-1）高校時代の生活を振り返る」「（1-2）受験生活を振り返る」質問項目が設定されていたが、データの変動はほとんどないことから、削除し、改訂版では「（3-5）親しい友人がこれまでに」の有無の項目とした。少し踏み込んだ内容であり、新入生としては答えにくい学生もいると予測されたが、質問項目の流れを考え、（3-5）としてⅢの最後の質問項目とした。そして、「Ⅳ 大学から受けられる情報 支援について」学生がどのようなものを大学に求めているか実態を把握するために、新たに質問を追加した。「（4-1）どんな情報 支援があるといいですか」については、自由記述で回答を求めることを考えたが、入学して間もない新入生にとって大学という場所がどのような場

であり、どんな情報や支援が受けられるかもイメージが掴めないと思われることから、7つの選択肢を設定した。

2. 調査の概要

- (1) 調査方法：2006年より毎年実施している質問紙「相談室アンケート」（後藤他，2007）の調査項目の改定を行い、10の質問項目と自由記述を含めた質問紙調査。
- (2) 調査日時：以下の日程で行った各学部向けの入学時オリエンテーションの際に、学生相談室の概要説明を行った後に調査を実施
2017年4月6日（音楽領域 芸術教養領域 人間発達学部）
2017年4月8日（美術領域 デザイン領域）
- (3) 調査対象：2017年度入学者全員（442名）

IV 結果・考察

1. 調査結果

調査への回答者数及び回答率は表2に示した通りである。入学者数は442名に対して回答者は418名であり、回答率は94.6%であった。その領域・学部も87.7%～99.4%と高い回収率であった。

(1) これまでの生活について

「1-1 高校時代の生活」を振り返っての満足度を表3に示した。全体では75.9%の新生入生が「満足であった」「どちらかといえば満足であった」と答えており、「どちらかというとなら満足であった」「不満であった」とするものは7.7%と低く、これまでの調査結果と同様の結果となった。

ただ、「どちらかというとなら満足であった」「不満であった」との回答は、人間発達学部は例年の調査では3.0%以下に留まっていたものが、2017年度は11.4%とやや多いことが示されている。

(2) 本学への志望から入学まで

「2-1 本学への受験を決定した時期」「2-2 本学へ入学した気分」について尋ねた結果を表4に示した。

「受験を決定した時期」については、全体では「高校3年」が57.9%と他の時期と比べ高く、「高校1、2年生」「高校3年」を合わせると全体で88.5%と多くの新生入生が高校生の時期に決定している。

次に「本学へ入学した気分」では、全体として73.5%の学生が「満足である」もしくは「どちらかといえば満足である」と答えており、本学への入学を満足とする学生の割合はこれまでの調査結果と同様に高い水準といえる。

表2 回答者および回答率

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域 芸樹教養領域	美術領域	デザイン 領域		
入 学 者 数	114	75	176	77	442
回答者数 (%)	100 (87.7)	73 (97.3)	175 (99.4)	70 (90.9)	418 (94.6)

表3 I これまでの生活について

1-1 高校時代の生活を振り返って全体として

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
満足であった	38.0	30.3	38.4	50.0	38.8
どちらかといえば満足であった	38.0	42.1	37.8	28.6	37.1
どちらともいえない	22.0	13.2	17.4	10.0	16.5
どちらかといえば不満であった	2.0	10.5	5.2	5.7	5.5
不満であった	0.0	3.9	1.2	5.7	2.2
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

表4 II 本学への志望から入学まで

2-1 本学への受験を決定したのは

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
中学時代（それ以前）	2.0	1.3	0.6	0.0	1.0
高校1・2年	39.0	27.6	29.7	24.3	30.6
高校3年	50.0	46.1	61.6	72.9	57.9
浪人時代	1.0	9.2	2.9	0.0	3.1
願書を出す頃	3.0	5.3	4.1	0.0	3.3
一旦就職してから	3.0	2.6	0.0	0.0	1.2
他大学に在学中	0.0	3.9	0.6	1.4	1.2
その他・無回答	2.0	3.9	0.6	1.4	1.7

2-2 本学（学部）に入学して、あなたの気分は

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
満足である	47.0	30.3	28.5	51.4	37.1
どちらかといえば満足である	34.0	38.2	39.5	30.0	36.4
どちらともいえない	12.0	21.1	22.7	14.3	18.4
満足ではないが、このままで、頑張りたい	5.0	6.6	7.6	4.3	6.2
できれば転学部（転学科）したい	0.0	1.3	0.0	0.0	0.2
できれば他大学を再受験したい	2.0	2.6	1.7	0.0	1.7
その他・無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

表5 Ⅲ 現在の心境について

3-1 現在、不安や心配を感じていることは

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
大いにある	18.0	23.7	35.5	20.0	26.6
少しある	72.0	57.9	56.4	60.0	61.0
ほとんどない	8.0	7.9	5.8	15.7	8.4
ない	2.0	9.2	1.7	4.3	3.6
無回答	0.0	1.3	0.6	0.0	0.5

3-2 不安や心配に思っている内容は(3つ以内)

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
学業	75.0	52.6	69.8	75.7	68.9
家族の関係	0.0	2.6	2.9	1.4	1.9
学費経済的問題	21.0	35.5	36.0	17.1	29.2
進路就職	34.0	42.1	44.2	42.9	41.1
友人異性関係	21.0	27.6	33.1	28.6	28.5
心身の状態	14.0	21.1	8.7	17.1	13.6
その他	4.0	5.3	4.1	1.4	3.8
無回答	0.0	7.9	2.9	4.3	3.3

3-3 不安や心配なときに、相談できる相手が身近に

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
いる	90.0	84.2	90.7	90.0	89.2
いない	9.0	14.5	7.6	10.0	9.6
無回答	1.0	1.3	1.7	0.0	1.2

3-4 そのときの相談相手 話し相手は

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
友人	67.7	59.2	67.7	75.8	67.5
家族	28.1	31.0	30.4	21.2	28.4
先生	0.0	1.4	0.6	0.0	0.5
SNS	4.2	5.6	0.6	3.0	2.8
その他	0.0	2.8	0.6	0.0	0.8

3-4 (II) そのときの相談相手 話し相手 (2つ以上選択した人の割合)

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
選択を2つ以上した人 (割合)	33.3	33.8	41.6	31.8	36.5

3-5 親しい友人がこれまでに

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
いる	94.0	85.5	91.3	88.6	90.4
ほとんどいない	3.0	10.5	5.2	8.6	6.2
いない	0.0	2.6	1.2	1.4	1.2
その他	1.2	1.3	0.6	1.4	1.0
無回答	2.0	0.0	1.7	0.0	1.2

表6 IV 大学から受けられる情報 支援について

4-1 どんな情報 支援があるといいですか (3つ以内)

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
学修 実技課題 テスト情報	84.0	69.7	87.2	84.3	82.8
サークル アルバイト案内情報	42.0	40.8	47.7	38.6	43.5
一人暮らしの生活について	5.0	13.2	9.3	11.4	9.3
コミュニケーションの取り方について	9.0	19.7	20.3	5.7	15.1
資格 就職など卒業後の情報	51.0	55.3	65.7	55.7	58.6
心の健康 ストレス対処方法	10.0	21.1	9.3	7.1	11.2
その他	0.0	0.0	1.2	0.0	0.5
無回答	0.0	0.0	0.6	2.9	0.7

4-2 心配なこと 不安なことについて、学生相談室を利用したいと思いますか

	芸 術 学 部			人間発達 学 部	名 芸 大 全体
	音楽領域	美術領域	デザイン 領域		
すぐにでも相談に行きたい	3.0	1.3	0.6	1.4	1.4
近いうちに相談に行きたい	0.0	2.6	6.4	1.4	3.3
いつか相談に行きたい	17.0	25.0	20.3	25.7	21.3
必要を感じたら行きたい	63.0	47.4	56.4	44.3	54.3
いまのところは必要を感じない	16.0	19.7	14.0	27.1	17.7
その他	0.0	2.6	0.0	0.0	0.5
無回答	1.0	1.3	2.3	0.0	1.4

(3) 現在の心境について

「3-1 現在、不安や心配を感じていることは」の有無、「3-2 不安や心配に思っている内容」(複数選択=3項目以内)、「3-3 不安や心配なときに相談できる相手が身近にいるか」の有無、「3-4 そのときの相談相手、話し相手」の選択、「3-5 親しい友人がこれまでにいるか」の有無の結果を表5に示した。

「現在、不安や心配を感じていること」が「大いにある」「少しある」と回答した学生は、全体で87.6%であり、「ほとんどない」「ない」と答えた学生は12.0%となった。「大いにある」「少しある」と回答した学生は、各領域・学部ともに80.0%~91.9%と高く、「ほとんどない」「ない」は人間発達学部で最も多く20.0%であった。多くの学生が現在、不安や心配を感じている状況にあり、渡邊他¹⁶⁾が指摘するように、青年期にある彼らが現在の生活の中で不安や心配を感じることはあるべき姿なのかもしれない。これまでの調査結果では悩むことが「ない」と回答した学生は2016年度では全体で35.0%、2015年度では全体で34.8%となっており、「悩みがない」「悩めない」あるいは「自身の感情の把握や言語化が苦手」な学生が増加していると述べてきた(北岡他⁴⁾(栗津他³⁾)。しかし、本調査結果では、「ほとんどない」「ない」と回答した学生は、減少が見られる。この結果について、質問表記を変更したことが数値の変化に関与したのではないかと考えられる。「悩み」というこれまでの質問表記を「不安や心配を感じていること」と表記を変更し、尺度についてもこれまでは3段階であったものを「大いにある」「少しある」「ほとんどない」「ない」の4段階に変更したことにより学生にとって選択しやすくなったと推測される。悩むまでには至らないが漠然とした不安や心配を感じているのが現在の学生に見られる特徴なのかもしれない。桐山¹⁷⁾は大学生のアイデンティティ形成のために必要であるが、現代の育ちの過程では十分に育まれていない能力として以下の3つを挙げている。①考える力=悩む力=言葉の力、②人とつながる力、③自己肯定感、である。また桐山は「青年期は、言葉を使い考え悩む中で多様な自分を発見する時期であるが、現代の育ちの過程では、自分について考える機会が乏しくなっており、自分について『考える』『悩む』という内に向かう営みは、『暗い、生産的でない』といった否定的な価値づけをされることが多く、大人が望むのは『ポジティブ思考』で『結果』の出せる『明るく元気』な『良い子』である」と述べている。このような現代の学生が育ってきた社会環境や家族環境など様々な要因が「悩む」までには至らず「何となく不安」といった学生の心性の特徴の一つなのかもしれない。

つぎに「不安や心配に思っている内容」(複数選択=3項目以内)については、大学全体として「学業」(68.9%)と最も高く、次いで「進路就職」(41.1%)、以下「学費経済的問題」(29.2%)、「友人異性関係」(28.5%)の順で多く、このような順位はこれまでの調査結果と同様であった。

「不安や心配なときに、相談できる相手が身近にいるか」の有無を尋ねたところ、大学

全体では89.2%が「いる」と答え、「いない」と答えた者は9.6%であった。各領域・学部ともに「いる」と答えた割合は8割を超えて高く、多くの学生が身近に不安や心配なことを話すことができる相手がいることが窺える。「そのときの相談相手・話し相手」として「友人」が大学全体として67.5%と最も高く、次に「家族」(28.4%)となった。「SNS」を選択した者は2.8%という結果となった。「先生」を選択した者は僅か0.5%と低く、「先生」という対象は、学生にとって指導や教育を受ける側で上下の関係の立場になりやすく、身近な対等に話ができる、相談できる関係とは異なるとも考えられる。むしろ「SNS」の方が全体として2.8%となっており、身近なものとして感じられているのかもしれない。「そのときの相談相手・話し相手」の質問は複数選択として回答を求めていなかったのだが、調査結果では、複数選択をした学生が3割を超えていた。その結果を3-4(Ⅱ)に示した。その中でも、「友人」「家族」と2項目以上を身近な相談相手・話し相手として選択している学生が最も多く(80%を超えている)。また、複数選択をした学生の中に「先生」「SNS」を選択する学生が全体で10%を超えている結果となった。この結果から、身近に相談できる・話し相手となる対象は、1つというわけではなく、複数の対象がいることが窺えられる。話したい内容、相談内容によって、その話を聞いてもらう相手、つまり対象は変わることは十分に考えられ、むしろそれが自然なことであるとも考えられる。複数回答を設定していなかった故、1つ選択した学生の中にも本来は複数身近に話しができる相手・相談できる相手がいるのかもしれないが、1つに選択を絞ったことも推測される。そのため、話し相手相談相手が複数いる中で1つに項目を絞って選んだ学生と、複数選択をした学生では、その相談相手話し相手の意味合いや重みは異なるのかもしれない。ただ、今回の調査では質的なことについては推測に留まっており、今後、複数選択ができるように設定する必要があると思われる。

次に「親しい友人がこれまでに」の有無については、これまでに「いる」と回答する学生は全体で90.4%となっており、これまで同様の結果となっている。

(4) 大学から受けられる情報・支援について

「4-1大学からどんな情報や支援を希望するか」(複数選択=3項目以内)、学生相談室の利用の意向を尋ねた結果を表6に示した。

新入生が大学から「学習・実技課題・テスト情報」を得たいと最も希望しており、各領域、学部ともに高い割合を示している。「資格・就職などの情報」では学内全体で58.6%以上が希望している。大学生にとり、修学の問題は避けて通ることのできない課題であり、学業を修め、就職へと繋がることを期待していることが窺える。大学という高等教育機関において、学生はそれぞれの専門領域の学業を修めることが期待されており、それがうまくいかない場合は深刻な問題となる(吉良¹⁸⁾)。日本学生相談学会が行った全国856学生相談機関の調査¹⁹⁾では、「勉強・進路」の問題が相談内容全体の22.5%を占めており、修学問題で学生相談窓口を利用する学生の割合は非常に高い。このことから、入学して

間もない学生たちにとり、「授業についていくことができるか」、「課題やテストをやっていけるだろうか」と、情報がなく授業の様子が分からない段階では、不安にはなりやすいと思われる。授業が開始され、様子を分かるにつれて、入学時点とはまた気持ちに変化があると推測されるが、「修学問題は学生の様々な心理的課題を採求する糸口となる(田中²⁰⁾)」ことから、丁寧な修学支援や情報が求められており、必要であると思われる。

次に注目するのは、「コミュニケーションの取り方」「心の健康・ストレス対処方法」の支援希望の割合に注目して見ていきたい。「コミュニケーションの取り方」については、大学全体では15.1%となっており、美術領域、デザイン領域では音楽領域や人間発達学部と比べると高く、20%近くになった。また、「心の健康・ストレス対処方法」については、全体では11.2%であったが、美術領域では21.1%と他領域と比較すると高くなっている。青年期は自己探求の時期でもあり、さまざまな心のストレスを抱えやすい時期でもある。美術やデザインなど、多くの作品を制作する過程の中で、学生は自己を見つめる体験をしている。新入生の中にも既にストレスを抱えやすい自分を意識している者が一定の割合でいることが窺えられる。また、コミュニケーションについては、ツールとしてネットやSNSなど発展はしているものの、実際に人と向かい合ってコミュニケーションを取ることは「自信がない」と言う学生や、また、コミュニケーションが大切と謳われる現在、過剰にコミュニケーションの取り方を意識してしまう学生がいることは、日々の学生との面接でも実感されることがある。学生相談室としては、個別の学生相談に加え、心の健康やストレス対処方法などの予防・啓発活動などを企画することや、栗津他²¹⁾が報告するように、学内の他部署と連携しながら学生支援の企画を実施したり、他大学で行われているような、人間関係やコミュニケーションに関するスキルの学習を主たるねらいとしてグループワークを提供できればと考える。

「4-2心配なこと 不安なことについて学生相談室を利用したいか」については、「すぐにでも」「近いうちに」と答えたものが大学全体で4.7%と概ね従来通りの結果となっている。

2. 「学生相談室アンケート」の項目の再検討点

2017年度は従来の「学生相談室アンケート」の項目を改訂して実施した。90%を超える高い回収率から、新入生にとって改訂されたアンケート内容は大きな負荷にはならず実施されたと思われる。質問の表記の仕方により、従来とは異なる結果が見られた。特に「悩むことがあるか?」という従来のアンケート項目表記を「不安」「心配」と表記を変更した項目では、「不安や心配がある」と答えた学生の割合が増えたことから、アンケートでは現在の学生特徴に合わせた表記で実施すること必要であると理解できた。また、調査実施し結果が分かったことで、初めの質問設定にミスがあったことも把握できた。「3-4 そのときの相談相手・話し相手」では、今後、複数選択ができるように表記したい。既存

の「UPI」や「困り感に関するチェックリスト」なども目的や状況によっては有益な調査実施できると思われるが、前述したようにリスクを伴うことがある。新入生にそのリスクを伴わせるということは、学生相談室が学生支援を考える上で慎重にならなくてはならない。このことから、目の前の学生の内的心理的な特徴を日々の臨床活動を通して把握理解しながら、今後もそれに即したアンケートの質問項目を考えていきたい。

文献

- 1) 後藤倬男・橋本裕明・粟津幹子・加藤友希恵・橋本容子・北岡智子 新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要第28号, 2007, 97-105.
- 2) 山内恵理子・木村美奈子・橋本裕明・粟津幹子・井村安之・伊藤由夏・北岡智子・渡邊美由記 2016年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要第38号, 2017, 281-293.
- 3) 粟津幹子・木村美奈子・佐藤勝利・菅嶋康浩・北岡智子・伊藤由夏・山内恵理子・渡邊美由記 新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察—5年間の結果比較と共に—. 名古屋芸術大学研究紀要第36号, 2015, 15-30.
- 4) 北岡智子・佐藤勝利・木村美奈子・菅嶋康浩・粟津幹子・伊藤由夏・山内恵理子 新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要第35号, 2014, 141-153.
- 5) 早坂浩志 第10章 学生に向けた活動2—授業以外の取り組み—. 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会【編】 学生相談ハンドブック, 学苑社, 2010, 185-201.
- 6) 近田輝行 UPIの役割と意義(1)—立教大学の23年間を振り返る—. 立教大学学生相談室報告書第12号, 1993, 3-13.
- 7) 松原達哉 UPI 学生精神的健康調査. (松原達也編 心理テスト法入門第4版—基礎知識と技法習得のために—) 日本文化科学社, 2004.
- 8) 吉武光世 UPI からみた新入生の心の健康状態について—他大学との比較を通して—. 東洋女子短期大学紀要第20号, 1995, 33-52.
- 9) 吉村真理子 学生相談室におけるUPI活用の検討. 千葉敬愛短期大学紀要第20号, 1998, 125-131.
- 10) 酒井渉・松井祥子・四間丁千枝 University Personality Inventory 短縮版作成の試み—項目反応理論を用いたGeneral Health Questionnaire-30との比較から—. 学生相談研究第32巻第2号, 2011, 120-130.
- 11) 東京都市大学 DOL 支援プロジェクトホームページ「勉強に関する新入生アンケート調査報告」
- 12) 佐藤克敏 第1章 発達障害のある学生への支援の現状と課題—発達障害のある学生支援ケースブック—支援の実際のポイント. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 日本学生支援機構, 2007, 2-7.
- 13) 佐藤克敏 付録1 困り具合に関するセルフチェックリスト. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所共同研究報告書, 2007, 122-124.
- 14) 滝沢宏忠 第3章 より良い支援につなげるためのチェックリストの活用. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 日本学生支援機構, 2009, 11-12.
- 15) 土井隆義 つながりを煽られる子どもたち ネット依存といじめ問題を考える. 岩波ブックレット 903, 2014.

- 16) 渡邊美由記・木村美奈子・橋本裕明・栗津幹子・井村安之・伊藤由夏・北岡智子・山内恵理子 2015年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要第37号, 2016, 311-321.
- 17) 桐山雅子 第2章 大学生を理解する視点 1 現代の学生の心理的特徴. 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会〔編〕 学生相談ハンドブック, 学苑社, 2010, 30-34.
- 18) 吉良安之 第4章 相談内容に応じた援助 2 修学に関する相談. 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会〔編〕 学生相談ハンドブック, 学苑社, 2010, 71-74.
- 19) 大島啓利・青木健次・駒米勝利・山口正二 2006年度学生相談機関に関する調査報告. 学生相談研究第27巻3号, 2007, 238-273.
- 20) 田中健夫 大学生の相談事例からみた修学上の行き詰まりの様相. 青年心理学研究第19号, 2007, 33-50.
- 21) 栗津幹子・北岡智子・木村美奈子・橋本裕明・井村安之・伊藤由夏・山内恵理子・渡邊美由記 学内連携を活かした学生支援プログラム—新入生及び在生を対としたグループ活動の報告—. 名古屋芸術大学研究紀要第38号, 2017, 15-31.

添付資料 1

学生相談室アンケート

新生生の皆さん、ご入学おめでとうございます。大学生活では、これまでよりも、勉強、サークル、アルバイトなど、自分の判断で行動していかなければならない場合が多くなると思います。学生相談室は、皆さんがより豊かな大学生活を送られるように、自分の性格、対人関係、家族、将来、学業、その他の生活全般について、悩みや迷いが起こったときに、気軽に相談できる場所です。

このアンケートは、学生相談活動以外の目的には使用しません。個人のプライバシーは厳守いたしますので、さしつかえない範囲でありのままにお書き下さい。

回答は、質問項目の番号に○を付けて下さい。とくに指定がない場合には、1つだけ回答して下さい。

ふりがな

氏名： 学籍番号： 性別：男・女 年齢： 歳

学部： 学科(領域)： 住居：自宅・下宿

I これまでの生活について

これまでの生活(高校や社会人時代)をふり返って
全体として

1. 満足であった
2. どちらかといえば満足であった
3. どちらともいえない
4. どちらかといえば不満であった
5. 不満であった

II 本学への志望から入学まで

(2-1) 本学への受験を決定したのは

1. 中学校時代 (それ以前)
2. 高校1・2年
3. 高校3年
4. 浪人時代
5. 願書を出す頃
6. 一旦就職してから
7. 他大学に在学中
8. その他 ()

(2-2) 本学(学部)に入学して、あなたの気分は

1. 満足である
2. どちらかといえば満足である
3. どちらともいえない
4. 満足ではないが、このままで頑張りたい
5. できれば転学部(転学科)したい
6. できれば他大学を再受験したい

III 現在の心境について

(3-1) 現在、不安や心配に感じていることは

1. 大いにある
2. 少しある
3. ほとんどない
4. ない

(3-2) 不安や心配に思っている内容は(3つ以内)

1. 学業
2. 家族の関係
3. 学費経済的問題
4. 進路就職
5. 友人異性関係
6. 心身の状態
7. その他 ()

(3-3) 不安や心配なときに、相談できる相手が身近に

1. いる
2. いない

(3-4) そのときの相談相手 話し相手は

1. 友人
2. 家族
3. 先生
4. SNS (ツイッターなどの交流サイト)
5. その他 ()

(3-5) 親しい友人がこれまでに

1. いる
2. ほとんどいない
3. いない
4. その他 ()

IV 大学から受けられる情報 支援について

(4-1) どんな情報 支援があるといいですか(3つ以内)

1. 学習 実技課題 テスト情報
2. サークル アルバイト案内情報
3. 一人暮らし生活について
4. コミュニケーションの取り方について
5. 資格 就職など卒業後の情報
6. 心の健康 ストレス対処法
7. その他 ()

(4-2) 心配なこと不安なことについて、学生相談室を利用したいと思いますか。

1. すぐにも相談に行きたい
2. 近いうちに相談に行きたい
3. いつか相談に行きたい
4. 必要を感じたら行きたい
5. いまのところ必要を感じない
6. その他 ()

★ 1と2. に○を付けた方の中で、学生相談室から連絡をしても大丈夫な方は、下記にメールアドレスを記入してください。5月前後に相談室から様子伺いのメールを送りません。3以降に○をつけた方でも、連絡を希望される方も記入してください。

[]

アンケートは以上になります。ありがとうございました。

★ 何かあればご自由にお書き下さい。

[]